



TITLE:

再び保険償額について - 北村五良 教授の批判に應ふ -

AUTHOR(S):

佐波, 宣平

CITATION:

佐波, 宣平. 再び保険償額について - 北村五良教授の批判に應ふ -. 經濟
論叢 1936, 42(2): 476-483

ISSUE DATE:

1936-02-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130739>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論經濟

號 二 第

卷二十四第

行發日一月二年一十和昭

論 叢

農業者商工業者の税負擔……………法學博士 神戸正雄

純限界生産力說……………文學博士 高田保馬

幕末における幕府有司の開國思想……………經濟學博士 本庄榮治郎

時 論

日・滿・獨三角貿易の可能性について……………經濟學博士 谷口吉彦

研 究

貨幣價格の運動……………經濟學士 飯田藤次

所得概念より見た租稅論……………經濟學士 島 恭彦

說 苑

再び保險價額について……………經濟學士 佐波宣平

獨逸電力事業の統制……………經濟學士 田 杉 競

收穫遞減法則に就いて……………經濟學士 山岡亮一

附 錄

新着外國經濟雜誌主要論題

説苑

再び保險價額について

——北村五良教授の批判に應ふ——

佐波宣平

一

昭和十年十二月一日發行の「國民經濟雜誌」は神戸商業大學北村五良教授の「保險價額論の一節」なる論説を收載してゐるが、それは、それに附せられたる傍題——佐波學士の「保險價額規定無用論」を讀みて——の示すやうに、私の過般の研究（本誌第四十一卷第三號）に對して北村教授が特になされたる批判である。私はこれが大いなる興味をもつて讀み了へ、また尠からざる啓發を受けた。こゝに、教授がかやうに特に拙稿に對して批判の筆を執られたることに對し深く感謝の意を表する。併し、それにも拘はらず、私はいま教授の批判に

應ふるの一文を草しなければならない。

北村教授の保險價額に關する論旨は私のそれとは全く逆である。そして、それは、讀者の誰でもが直ちに氣づくであろうやうに、吾等兩者の主張の根本をなすところの保險價額の概念の決定が全く相反してゐるところに基因してゐる。教授の主張は、保險價額の概念に關する限り、從來一般の法律學者の採るところの客觀主義¹⁾をそのまゝ代表するものである。これに反して、私はこの客觀主義の考へ方が實際の保險市場に於て殆んど適用性をもたないといふのである。私はこれについては既に過般の研究に於て言ひつくしたところであり、改めて説明をなすを要しないのであるけれども、いま、北村教授よりの批判を受け、これに應ふの意味をもつて、兩者の主張をかやうに異らしめたる基因であるところの保險價額の概念について並びにその法律規定について簡單ながら説明を施したい。重ねて保險價額に關して私見を述べることに對して讀者の諒解を求める次第である。

1) 拙稿、本誌、第四十一卷第三號第二節參照

1. **Introduction**
 2. **Methodology**
 3. **Results**
 4. **Discussion**
 5. **Conclusion**
 6. **References**
 7. **Appendix**
 8. **Index**
 9. **Glossary**
 10. **Notes**
 11. **Footnotes**
 12. **Endnotes**
 13. **Supplementary Material**
 14. **Tables**
 15. **Figures**
 16. **Equations**
 17. **Formulas**
 18. **Diagrams**
 19. **Charts**
 20. **Graphs**
 21. **Tables**
 22. **Figures**
 23. **Equations**
 24. **Formulas**
 25. **Diagrams**
 26. **Charts**
 27. **Graphs**
 28. **Tables**
 29. **Figures**
 30. **Equations**
 31. **Formulas**
 32. **Diagrams**
 33. **Charts**
 34. **Graphs**
 35. **Tables**
 36. **Figures**
 37. **Equations**
 38. **Formulas**
 39. **Diagrams**
 40. **Charts**
 41. **Graphs**
 42. **Tables**
 43. **Figures**
 44. **Equations**
 45. **Formulas**
 46. **Diagrams**
 47. **Charts**
 48. **Graphs**
 49. **Tables**
 50. **Figures**
 51. **Equations**
 52. **Formulas**
 53. **Diagrams**
 54. **Charts**
 55. **Graphs**
 56. **Tables**
 57. **Figures**
 58. **Equations**
 59. **Formulas**
 60. **Diagrams**
 61. **Charts**
 62. **Graphs**
 63. **Tables**
 64. **Figures**
 65. **Equations**
 66. **Formulas**
 67. **Diagrams**
 68. **Charts**
 69. **Graphs**
 70. **Tables**
 71. **Figures**
 72. **Equations**
 73. **Formulas**
 74. **Diagrams**
 75. **Charts**
 76. **Graphs**
 77. **Tables**
 78. **Figures**
 79. **Equations**
 80. **Formulas**
 81. **Diagrams**
 82. **Charts**
 83. **Graphs**
 84. **Tables**
 85. **Figures**
 86. **Equations**
 87. **Formulas**
 88. **Diagrams**
 89. **Charts**
 90. **Graphs**
 91. **Tables**
 92. **Figures**
 93. **Equations**
 94. **Formulas**
 95. **Diagrams**
 96. **Charts**
 97. **Graphs**
 98. **Tables**
 99. **Figures**
 100. **Equations**
 101. **Formulas**
 102. **Diagrams**
 103. **Charts**
 104. **Graphs**
 105. **Tables**
 106. **Figures**
 107. **Equations**
 108. **Formulas**
 109. **Diagrams**
 110. **Charts**
 111. **Graphs**
 112. **Tables**
 113. **Figures**
 114. **Equations**
 115. **Formulas**
 116. **Diagrams**
 117. **Charts**
 118. **Graphs**
 119. **Tables**
 120. **Figures**
 121. **Equations**
 122. **Formulas**
 123. **Diagrams**
 124. **Charts**
 125. **Graphs**
 126. **Tables**
 127. **Figures**
 128. **Equations**
 129. **Formulas**
 130. **Diagrams**
 131. **Charts**
 132. **Graphs**
 133. **Tables**
 134. **Figures**
 135. **Equations**
 136. **Formulas**
 137. **Diagrams**
 138. **Charts**
 139. **Graphs**
 140. **Tables**
 141. **Figures**
 142. **Equations**
 143. **Formulas**
 144. **Diagrams**
 145. **Charts**
 146. **Graphs**
 147. **Tables**
 148. **Figures**
 149. **Equations**
 150. **Formulas**
 151. **Diagrams**
 152. **Charts**
 153. **Graphs**
 154. **Tables**
 155. **Figures**
 156. **Equations**
 157. **Formulas**
 158. **Diagrams**
 159. **Charts**
 160. **Graphs**
 161. **Tables**
 162. **Figures**
 163. **Equations**
 164. **Formulas**
 165. **Diagrams**
 166. **Charts**
 167. **Graphs**
 168. **Tables**
 169. **Figures**
 170. **Equations**
 171. **Formulas**
 172. **Diagrams**
 173. **Charts**
 174. **Graphs**
 175. **Tables**
 176. **Figures**
 177. **Equations**
 178. **Formulas**
 179. **Diagrams**
 180. **Charts**
 181. **Graphs**
 182. **Tables**
 183. **Figures**
 184. **Equations**
 185. **Formulas**
 186. **Diagrams**
 187. **Charts**
 188. **Graphs**
 189. **Tables**
 190. **Figures**
 191. **Equations**
 192. **Formulas**
 193. **Diagrams**
 194. **Charts**
 195. **Graphs**
 196. **Tables**
 197. **Figures**
 198. **Equations**
 199. **Formulas**
 200. **Diagrams**
 201. **Charts**
 202. **Graphs**
 203. **Tables**
 204. **Figures**
 205. **Equations**
 206. **Formulas**
 207. **Diagrams**
 208. **Charts**
 209. **Graphs**
 210. **Tables**
 211. **Figures**
 212. **Equations**
 213. **Formulas**
 214. **Diagrams**
 215. **Charts**
 216. **Graphs**
 217. **Tables**
 218. **Figures**
 219. **Equations**
 220. **Formulas**
 221. **Diagrams**
 222. **Charts**
 223. **Graphs**
 224. **Tables**
 225. **Figures**
 226. **Equations**
 227. **Formulas**
 228. **Diagrams**
 229. **Charts**
 230. **Graphs**
 231. **Tables**
 232. **Figures**
 233. **Equations**
 234. **Formulas**
 235. **Diagrams**
 236. **Charts**
 237. **Graphs**
 238. **Tables**
 239. **Figures**
 240. **Equations**
 241. **Formulas**
 242. **Diagrams**
 243. **Charts**
 244. **Graphs**
 245. **Tables**
 246. **Figures**
 247. **Equations**
 248. **Formulas**
 249. **Diagrams**
 250. **Charts**
 251. **Graphs**
 252.

北村教授は保險價額の概念について極めて明白なる客觀主義に立つて、「損害保險契約に於ける損害填補は、個人の感情的損害或は全然主觀的價值判斷に立脚する財産的損害を填補することを目的とするものではなく、世人一般に對して通行する平均的な客觀的な損害をのみ損害として填補するのである。故に、損害發生可能の最高額を示す保險價額の算定に當りて標準となすべきは、客觀的、市場的標準であつて主觀的個人の標準ではあり得ないわけである。即ち、保險價額は一般的價額客觀的價額であるべきである。」と主張せられ、また、「保險價額は、保險關係者の意思とは獨立に、客觀的に、ある大さで存在すべきものである。」といはれる。併し、私は、これに對し、先づ、保險價額は、主觀的評價に基いて決定さるべきものとして、抗議するものである。

保險契約は被保險利益についての個人的利害關係に關してなされるのである。従つて、それに一般的客觀

再び保険價額について

的價額ありとし、それに基いて填補をなすことを内容とするといふことは、それ自身の目的に反するわけである。私は、北村教授とともに、「保險價額の概念は、損害保險契約といふ契約自體の精神によつて、これを理解せなければならぬ³⁾」と信ずる。然るに、損害保險契約は、それ自體の精神に於ては、被保險者が被保險利益について蒙むることあるべき損害を保險者が填補することをもつてその目的とするのである。従つて、先づ第一に、その損害額が幾許であるかは被保險者がその被保險利益に對して幾許の評価をなしてゐるかによつて定められなければならぬ。よつて、被保險者の被保險利益に對する評價といふことを無視しては、損害額、損害填補、損害保險契約といふことが全く無意味になつて來るのである。尤も、いふまでもなく、被保險者がたゞ個人的に評價するといふだけではそれは單なる主觀的評價たるにとゞまり、未だこれをもつて保險價額といふことは出來ない。その評價が保險價額としての意味をもつためには保險契約によつて規定を

受けなければならない。詳しく言へば、被保險者が相手方たる保險者の承諾を得たる價額、即ち、被保險者と保險者との合意によつて定められたる價額でなければならぬ。このことは、單に保險價額を豫め定むるところの謂はゆる價額協定保險の場合に於てさうであるばかりでなく、損害の發生に當つて損害額決定のために保險價額を定める場合に於ても亦さうなのである。而して、かやうに被保險者と保險者との合意によつて定められたる價額であればこそこれを特に保險價額といふのであつて、そこに、保險價額が賣買價格、擔保價格等と異なる意味をもつ所以が存するのである。

そして、既にそれが保險價額といふ意味をもつ限り、それは、必ず、被保險者の評價(個人的主觀的評價)を基礎として——保險者によつて修正せられるではあらうとも——ゐなくてはならない。この意味に於て、さきに示したる北村教授の「保險價額は、保險關係者の意思とは獨立に、客觀的に、ある大さで存在すべきものである。」との主張は、損害保險契約自體の精神に反す

るものと思ふ。保險關係者の意思とは獨立に客觀的に存在が規定されるのは被保險利益であつて、決して、被保險利益のもつ保險價額そのものではない。

これについて、松本蒸治博士が「保險價額ハ保險ノ目的物ノ客觀的價額ニ超ユルコトヲ得ストスル説アリ。普國法ハ此説ヲ採レリト雖モ必スシモ如上ノ制限ニ服スヘキ理由ナシ。被保險利益カ被保險者ノ有スル主觀的利益ナルコトヲ是認スル以上ハ此説ニ從フヘカラサルヤ明白ナリ。」¹⁾といへるは、一般法律學者のうちには稀なる主觀主義的見解であるけれども、蓋し、至言である。^(註)なほ、火災保險の實際に従事する志水政信氏の物件保險についての主張を引用するも、次の如く、私はこれを極めて適正と考へる。「按ずるに、物件保險は、被保險者が被保險利益に對して有する物質的利害關係を保險契約の目的とするものである。而して、價額は人が物に對する關係を土臺とするものであるから、同一物なるが故に常に同一價格であるとは一概に言ふ事が出来ない。即ち、物にのみ偏してはならぬ。

1) 松本蒸治著、保險法、初版、八四頁

必ずず人が物に對する關係なるものを根據とする事を忘れてはならぬ。¹⁾』

(註) 田中耕太郎教授は、松本博士の主觀主義に對して、「松本博士は被保險利益が被保險者の有する主觀的利益なりと言ふ理由を以て之に反對せらるゝも、被保險利益が主觀的のものなることは被保險利益の評価を主觀的に爲し得るといふ意味ではないと私は考へる。」²⁾といはれる。これについて、私は、既に被保險利益が被保險者の有する主觀的利益であるとすれば、それを被保險者が主觀的に評價してこそ初めて被保險利益が被保險利益としての意義をもち得るものであると思ふ。併し、さきにも述べたやうに、被保險者に於ける被保險利益の主觀的評價といふことゝ保險價額の決定といふことゝは意味が異なる。主觀的評價額が保險價額たり得るためには保險者によつて承諾——或は修正を経たる上で——されなければならない。要するに、被保險者は單なる評價だけならば主觀的になし得るけれども、保險價額を主觀的評價によつてのみ決定し得るものではない。こゝに於て、私は、田中教授の「被保險利益の評価を主觀的に……」との言葉は「被保險利益の保險價額の決定を主觀的に……」との意味に解すべきであると考へる。

いふまでもなく、商法法規が保險價額をもつて一般的、客觀的價額であるとの解釋のもとに立つてゐるの

再び保險價額について

は、かやうな解釋をしなければ謂はゆる超過保險なるものを理解することが出來ず、従つて、またこれを取り得ないからである。併し、私見によれば、既に保險價額は本來被保險者の主觀的評價を基礎として大きな定まるべきものであり、よつて、かやうな客觀主義は損害保險契約上の純理に反するわけであるが故に、商法の超過保險に關する取締法規(第三八六條の如き)もそれは正しい理論に立つものとはいへない。

以上は、保險價額に關する客觀主義に對する理論上の批判であるが、なほ、客觀主義は實際にも甚だしく適用性に乏しい見解なのである。即ち、次に述べる如くである。

三

さて、こゝに、假りに北村教授並びに一般法律學者の客觀主義的見解に従つて、「保險價額は一般的客觀的價額であるべきである。」とするにしても、吾々はこの一般的客觀的價額なるものを現實に算定し得ざる場合に屢々出喰はす。これについては、北村教授は「保險

1) 志水政信著、火災保險の理論と實際、二九、三〇頁

2) 田中耕太郎講述、保險法講義要領、八〇頁

價額は事實上具體的に存在するものである、¹⁾のである。事實上之を算定し得るものである。』といはれる。併し、私の考へによれば、何人も等しくこれを正當と認むるといふが如き一般的客觀的價額なるものは吾々が當面の研究對象とする具體的な現實の世界には到底これを求め得るものではない。現實に具體的に吾々が現代の商業市場に於て認識し得る多數の價格は、すべて特殊的個人的な條件によつて定まるものであつて、一つとして、すべての條件に充分妥當するといふ價格即ち、謂はゆる一般的客觀的價額なるものは存在しない。従つて、たとひ、いま、これら特殊的個人的價格のすべてを綜合し平均して（これも嚴密には不可能である）或る價格を算出したところで、それをもつて、個々の具體の場合に充分適用せしめることは出來ない。よつて、「保險價額は一般的客觀的價額であるべきである。」といふが如きはそれ自身嚴密には無意味である。或る財が一般的客觀的價額をもつ、といふ表現は、現實的具體的には、たゞ、或る財が何程かの大きさの

價格をもつ、といふ程度の極めて空漠たる意味しかもち得ない。なほ、これに對して、或は「嚴格な意味に於て一般的客觀的價額といふのではない。常識によつて判斷せられるところの、或る程度の融通性を與へるといふ意味に於ける一般的客觀的價額といふのである。」と主張する人があるかも知れない。併し、私は、それがどの程度の融通性を意味するのであるか、融通の程度によつては或は無決定と等しい結果となりはしないかと考へざるを得ない。

協定保險價額に關して、商法は第三九四條に於て「當事者カ保險價額ヲ定メタルトキハ保險者ハ其價額ノ著シク適當ナルコトヲ證明スルニ非サレハ其填補額ノ減少ヲ請求スルコトヲ得ス」となし、北村教授も亦、この法規と同じく、「保險價額の本質に反せざる限り、協定保險價額の保險價額よりの或程度の偏差は、これを認める……。極言すれば、保險價額を中心たる標準として協定保險價額には或る程度の偏差が許され得るといふことになり、この偏差がこの場合の自由であり、この中心たる標準が、この場合の制限である。」といはれる。これによれば、保險價額には實際上或る限度の融通性が許され得るわけなのであるが、併し、なほ、肝腎なところの、こゝに謂はゆる中心の標準たる保險價額即ち一般的客觀

1) 北村教授、前掲論文、三頁
2) 北村教授、前掲論文、四〇頁

的價額の決定にして未解決にとゞまる限り、客觀主義のこの協定保險價額に關する見解は、依然として、空虚たるに過ぎない。

吾々が或る財について價格といふときその價格は決してたゞ一つではあり得ない。一般法律學者に於ては財の價格は或ひは唯一無二、たゞ一般的客觀的價額あるのみと思つてゐるのかも知れない。事實、商法は、この保險價額に關してだけでなく一般に財の價格の決定については甚だしく不用意または無責任である。例へば、商法は、第二六條に於て、財産目錄の記載に關して、「財産目錄ニハ動産、不動産、債權其他ノ財産ニ價額ヲ附シテ之ヲ記載スルコトヲ要ス。其價額ハ財産目錄調製ノ時ニ於ケル價額ニ超ユルコトヲ得ス」と規定するのみであつて、如何なる價額に依據すべきかについては全く觸れるところがない。併し、それはとにかく、すべての財は現實には無數の種類の價格を有する。例へば、取得價格または購入價格、取得價格に減價銷却をなしたる價格、收益還元價格、賣却價格、擔

再び保險價額について

保價格等の種々なる價格があり、更にまた、これら一々の價格が各々條件を異にするに従つて、無數に分たれ得るのである。これをもつてして、一般的客觀的に妥當する價格を如何にして決定し得るか、それは實際には不可能または極めて困難なる問題である。

これに關する藤本幸太郎教授の説を再びこゝに引用すれば次の如くである。

「所謂被保險利益とは一定の事故に因つて財産上の損害を被る虞ある關係を云ひ、其客觀的價值を金錢に見積つたとき之を保險價額と名付ける。而して其目的と被保險者の間に存する關係は本來主觀的のものであつて、之を評價して客觀的價額を得ようとするが如きは殆んど云ふべくして行ふべからざることである。」¹⁾

四

さて、保險價額に關する保險市場の實際は如何といふに、損害に對する填補額は、多くの場合、保險契約當事者によつて殆んど自由に定められ得るところの保險金額に全く従つてゐるか、或はこれに甚だしく左右せられてゐる状態である。即ち、保險契約の當初または保險期間中に於て保險價額を定める場合（謂はゆる價

1) 藤本幸太郎著、海上保險論、六八頁

額協定保險の場合)にも、損害の發生するに及んで保険價額を決定する場合(商法第三九三條による場合)にも、契約當事者が先づ保険金額を定め、これに等しくまたはこれに應じて保険價額を定めるのであり、かくして、損害額またはこれに對する填補額は一般的客觀的價額に依據することなくして保険金額に従つて定められてゐるのである。これは、保険契約當事者が豫め損害填補額をして依據せしむるものとして保険金額を定めてゐる(勿論、保険料率その他の條件を考慮したる上)からであつて、このことにより、保険價額といふものは、謂はゞ骨抜き之形となり、従つて、第三者または仲裁裁判による被保険利益の價額の鑑定または判定といふことも實際には殆んど無意味となり、他方には、また、比例填補方法並びに超過保險について問題の起る餘地も殆んどないのである。

而して、かやうな實際的事情を生ぜしめてゐる根本的原因是、第一には、被保険者が被保険利益に對してなす主觀的評價に基いて當事者が保険金額を約定し、

これに依據して保険價額を定めてゐるといふことであり、次にはまた、假りに保険價額を、商法の一般解釋に従つて、一般的客觀的價額によつて定むべしとしても、その一般的客觀的價額を算定することが現實には不可能または極めて困難な場合が多いといふことである。なほ、これらの事情は、評價に關して種々困難な問題の存する財、例へば、建物、船舶、その他の固定資産財の保險について特に著しいのであつて、商品、運送品または積荷等の如く、仕入値段、インボイス値段等によつて評價をなすも殆んど差支へない財の保險については、それ程に困難な問題は生じない。

なほ、本問題に關して保險市場の實際につき述べべきものに、二重評價約款または二様保險價額特約條項(dual valuation clause)がある。これは、周知のやうに、特に船舶保險について近年さかんに用ひられる約款であつて、同一の船舶について保険價額を二様に定め、例へば、その一方(大なる保險價額)を全損に對して適用し、他の一方(小なる保險價額)をその他の損害たる

1) 藤本幸太郎著、前掲書、七四、七五頁、加藤由作著、海上損害論、一七九、一八〇頁、Ritter, C., Das Recht der Seeversicherung, Bd. I. S. 236.

救助費・修繕費・共同海損・衝突損害賠償等に對して適用するといふのである。¹⁾従つて、これは同時に同一保險者に對して同一の船舶が異なる内容をもつ二つの保險契約に附せられるわけであるが、とにかく、同一の被保險利益即ち船舶が同時に異なる保險價額をもつことを條件として認めるところの約款である。私は、このやうな二重評價についても、從來の客觀主義の如く、一般的客觀的價額のみをもつて保險價額とすべしとする解釋では、到底説明され得ないのではなからうかと考へざるを得ない。

五

要するに、損害保險に於て、被保險利益を一般的客觀的に評價するといふことは、先づ、損害保險契約自體の目的から見て妥當を缺き、次にまた、評價の技術的困難さからも實際には充分に行ひ得るところではない。こゝに於て、保險者と被保險者との合意に基いて（勿論、危險率、損害率、保險料率等の諸條件を考慮したる上）保險金額を約定し、この保險金額に等しくまたはこれ

に應じて保險價額を定め、これに従つて、損害の填補を行つてゐるのである。よつて、保險市場の實際に於ては、法規の解釋として「保險價額は一般的客觀的價額であるべきである」とする觀念は、多くの場合、單に實務の手續上からだけでなく、實質上にも著しく忘却または無用視されてゐる状態である。この意味に於て、財産保險または損害保險が、表面的には、恰も、人保險または生命保險の如く保險價額なる觀念を必要としないところの定額保險 (Summenversicherung) 化してゐるとも言へやう。

以上、簡略ながら、保險價額の概念並びにその法律規定に關して私見を陳べ、もつて、北村教授の批判に應へたる次第である。（一九三五、一二、二九）

1) 拙稿、船舶超過保險成立の根據について、本誌、第三十六卷、第二號、四二五頁以下。